

荒木寛畝<sup>あらかんぼ</sup>

明治三十三年帝室技芸員任命

《枯木雉子竹水仙葡萄之図》 一幅

明治三十六年（一九〇三）頃

絹本着色

本紙一三五・三×七〇・五



荒木寛畝（一八三一〜一九一五）は、谷文晁系の画家荒木寛快に入門し、後には養子となってその画風を受け継いだ。安政六年（一八五九）から明治四年（一八七二）までは土佐藩絵所預の職に就いていたが、その後五十歳間近に油彩画の習得を志し、川上冬崖や国沢新九郎に学んだ。その結果、五姓田義松、高橋由一と並んで油絵三大家と称される程の腕前を身につけるなど、画家として大変な器用さを持っていたことが知られる。五十年代半ばにして日本画へ再び転向してからは、師寛快と親交の深かった岡本秋暉に学んだ写実的な花鳥画を描き続けた。

寛畝は、油彩画を手がけていた時代の明治十二年（一八七九）、五姓田義松、高橋由一の二人とともに、元老院より明治天皇、昭憲皇太后および英照皇太后の御肖像の揮毫を命じられている。それが最初の皇室との縁だったかは判然

としないが、以降再び日本画を手がけるようになってからも、同十七年の皇居造営に際し杉戸絵の揮毫に加わったのははじめとして、宮内省よりしばしば御用を受け、同三十三年には帝室技芸員に任命された。パリ万国博覧会に関しては、寛畝は宮内省選出のメンバーにこそ入らなかったものの、宮内省で行われたその鑑査会に、鑑査員の一人として参加している。また寛畝は同博に「石頭孔雀」「枯木小禽」の二点を出品し、銀牌を受賞している。

本図は、寛畝の得意とした濃彩の花鳥図とは異なる、染料を主体とした淡い色彩が特徴である。肥瘦やにじみを活かした筆使いには、寛畝の日本画家としての熟達した技量が窺われる一方で、実在感を見る者に感じさせる雉子の描写には、写実的表現の可能性を求めて洋画までも修めた寛畝の冷静な観察眼がうかがえる。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

皇室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 47

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十年七月十九日発行

© 2008 The Museum of the Imperial Collections